

『毒入りチョコレート事件』(2009年)

アントニー・パークリー／著 高橋 泰邦／訳
東京創元社

試供品とされるチョコレートを食べた夫婦が中毒を起こした。夫は一命を取り留めたが、妻はその日のうちに亡くなってしまった。チョコレートから検出されたのは毒物であるニトロベンゼン。選ばれし「犯罪研究会」のメンバーたちは、それぞれ独自の視点と解釈で、毒殺事件の謎に迫ります。

チョコレートのように味わい深い英国古典ミステリーをご堪能ください。



『アーモンド入りチョコレートのワルツ』

(1996年)

森 絵都／作 いせ ひでこ／絵 講談社

森絵都さんは初めての短篇集です。「子供は眠る」「彼女のマリア」「アーモンド入りチョコレートのワルツ」の3作が入っています。どれもピアノ曲の調べから物語が生まれました。

奈緒は小学1年の時から絹子先生のところでピアノを習っています。週1回のレッスンで同い年の君絵と一緒に楽しくピアノに触れあっています。ある日、絹子先生のところにフランス人のサティおじさんがやってきました。レッスン後にサティおじさんと踊るワルツはとても楽しい時間でした。



『シヨクラティエの勲章』(2008年)

上田 早夕里／著 東京創元社

主人公のあかりは、父親が作る和菓子屋の店員です。ですが、和菓子より洋菓子里に興味があり、自分の仕事に一生懸命になれないでいます。そんな時、和菓子屋の二軒隣にシヨクラトリー（チョコレート店）ができました。そこは連日大にぎわい。気になったあかりは、チョコレートを買いに出かけ、店のシェフ長峰と出会います。彼は誇りを持った職人でした。あかりはお菓子に関する色々な相談を彼に持ちかけます。

お菓子をめぐる謎を解決するおはなしです。



『猫入りチョコレート事件』

見習い編集者・真島のよろず探偵簿』(2015年)

藤野 恵美／著 ポプラ社

真島は江角市のタウン誌「え～すみか」のアルバイト編集者。作業の合間に通う猫カフェで、従業員猫がいなくなる事件に遭遇します。臆病な従業員猫が2階の窓から飛び降りるなんてありえない！と捜査は難航。そこへチャイナドレスを着こなす美女、書道家の胡蝶が現れ、見事な推理で解決します。そして猫好き編集長がコレクションしているチョコレート菓子の猫フィギュアを巡り、ひと悶着。さらに猫を探し回る怪しい男たちの影も忍び寄ります。



『チョコレートの世界史』

近代ヨーロッパが磨き上げた褐色の宝石』

(2010年)

武田 尚子／著 中央公論新社

チョコレートの原料がカカオ豆であることは知られていますが、そのカカオ豆は食料としてだけでなく、薬として利用されたり、時代によっては貨幣としての役割を持っていたこともありまし。現在の日本では誰もが気軽に楽しめるチョコレートですが、昔は権力の象徴だったことも。奥深いチョコレートの歴史に思いを馳せてみませんか？



『銃とチョコレート』(2016年)

乙一／著 講談社

怪盗ゴディバは大富豪の家の財宝を狙い、犯行を続ける悪党です。そんなゴディバと対決をする名探偵ロイズは国民のヒーローです。怪盗ゴディバが盗みをはたらくと世間は名探偵ロイズの活躍を待ち望みます。そんななか、ロイズにあこがれる少年リンツは、偶然にも怪盗ゴディバにつながる手がかりを手に入れました。リンツはロイズと一緒に捜査にすることになりました。

登場人物や町の名前がチョコレートブランドの名前で趣向を凝らした作品です。

